ノンネイティブ日本語教師に対する「いい日本語教師」に関するPAC分析
ーその結果およびPAC分析使用の意義と留意点ー

坪根　由香里・八田　直美

1. はじめに

近年、海外における日本語教育が盛んになり、そこで教える教師のうち約7割が日本語を母語としない教師（以下 NNT）だという。筆者らは、このような状況からNNTの育成・研修が急務であると考え、NNT に対して日本語教育に関するビリーフ調査を量的・質的両面で実施し、それを教師研修と関係付けて考察して、教師研修の進む方向を提案したいと考えている。

本研究では、質的調査として PAC（Personal Attitude Construct）分析を取り入れ、教師である被験者個人の枠組みで考察する。PAC 分析では、まず被験者にある刺激文を与え、そこから連想される項目を自由に出してもらい、各連想項目間の類似度を評定（どれぐらい近いか遠いかを数字で表す）してもらう。その類似度距離行列をクラスター分析にかけてデンドログラムを出し、それに基づいたインタビューで、被験者自身にクラスター構造のイメージや解釈を報告してもらった上で実験者が総合的解釈を行う。PAC 分析ではこのようにして個人ごとに態度やイメージの構造を分析するが、個別性とともに、たとえ1事例であっても、ある種の典型としての普遍的法則が見いだせるとされている（内藤 2002）。また、自由連想により出された項目を被験者自身が解釈することから、時には被験者が意識していなかったことも引き出せる可能性がある。

本稿ではパイロット調査として日本滞在中の NNT に対して行ったPAC分析の結果、およびそこからわかったPAC分析をNNTに対して行う意義と留意点について述べたい。

2. 先行研究

PAC 分析を用いた教師研修関係の研究には、才田（1997）、才田・小河原（1999）、藤田（1996）、藤田・佐藤（1996）などがある。これらは教育実習の前後の実習生の意識の変化や実習生と現職教師の比較などを行ったものである。また、教師、実習生の「いい日本語教師」のビリーフに関する研究には、小澤・坪根（2008）、坪根・小澤・嶽肩（2008）、横林（2004）がある。

近年ではノンネイティブを対象とした研究も多く見られるようになった。学習者を対象としたものには、日本語力の低い留学生を対象とした横林（2005）、読解教材の内容に対する学習者の意識を調べた丸山（2007）、作文授業前後の書くことに対する意識変化を調べた藤田（2007）、学習者の日本語学習における自己評価を調べた八若（2007）、非漢字圏学習者の漢字観を調べた池田（2007）等がある。一方、教師を対象としたものには、タイ人日本語教師の日本語教師観（古別府 2008）、ルーマニア人日本語教師の日本語教育観（平野 2008）に関する調査がある。

3. 調査の方法

3.1 調査協力者

日本滞在中の NNT 3名に対して PAC 分析を実施したが、本稿ではうち2名分を扱う。協力者Xは中国出身30代女性で日本語教師歴は15年、協力者Yはタイ出身40代女性で日本語教師歴は10年である。

3.2 調査の手順

①以下の提示刺激を紙で示し、口頭で読み上げて、連想項目をカード（A4の8分の1サイズ）に記入してもらった。

あなたにとって、「いい日本語の教師」とはどんな教師ですか。その先生は教室内外でどんな振る舞いをすると思いますか。また、その先生は日本語教育についてどんなことを考えている

と思いますか。その先生と出会ったとき、あなたはどんな気持ちになると思いますか。そういったことを含めて、あなたが「いい日本語教師」という言葉を聞いて思い浮かべるキーワードやイメージを自由に書いてください。

②それぞれのカードを重要度順に並べかえ、番号を記入してもらった。③カードに書かれた項目同士の直感的なイメージの近さを7段階で評定してもらい（「1 非常に近い」～「7 非常に遠い」）、全ての連想項目間でこの類似度評定を行って、類似度距離行列を得た。④③の結果を HALBAU というソフトを用いてクラスター分析（平方距離、ウォード法）にかけ、デンドログラムを作成した。⑤デンドログラムを協力者に示し、解釈を尋ねた。⑥各連想項目について、プラスのイメージか（+）、マイナスのイメージか（−）、どちらでもないか（0）を答えてもらった。⑦ PAC 分析終了後、大変だったところや難しかったところ、感想などを尋ねた。

4. 結果

4.1 協力者 X に対する PAC 分析

類似度行列を表1、デンドログラムを図1に示す。

表 1. X の連想項目間の類似度距離行列

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
(1)										
(2)	3									
(3)	3	2								
(4)	2	4	4							
(5)	1	4	3	1						
(6)	4	6	5	4	4					
(7)	3	4	2	2	2	6				
(8)	6	7	7	6	6	5	4			
(9)	4	3	2	4	3	5	2	6		
(10)	7	6	6	5	5	6	3	4	3	

図1の通り、4つのクラスター（以下 CL）が形成された。X は CL1 では日本語を上手に教えることの重要性を指摘し、教師も学生も生き生きし、授業がうまくいった満足感の色として黄色にたとえた。CL2 は X の学生時代の経験から明るい先生への志向が見られる。また、学生について把握していれば授業の工夫や授業計画、授業後のふりかえりに生かせるとした。CL3 では日本語教師という仕事が好きであることが第一条件であるとし、他者を受け入れ、自分を開くことの重要性を述べている。CL4 は日本の情報を多く持つこと、情報の取り出し方を知っていることを挙げ、経験的知識が NNT 教師に不足していることへの意識が感じられる。各 CL は CL1 が＜より良い教授方法を目指す教師＞、CL2 が＜学習者を理解している明るい教師＞、CL3 が＜教室外の取り組みにも積極的な教師＞、CL4 が＜日本関係リソースの充実した教師＞と名付けられる。

4.2 協力者 Y に対する PAC 分析

類似度行列を表2、デンドログラムを図2に示す。

表 2. Y の連想項目間の類似度距離行列

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)
(1)																
(2)	1															
(3)	1	1														
(4)	2	2	1													
(5)	2	2	1	1												
(6)	3	1	1	2	1											
(7)	3	1	1	1	2	3										
(8)	4	5	4	2	2	1	4									
(9)	3	4	3	1	1	1	2	1								
(10)	3	3	4	1	2	1	4	3	2							
(11)	3	4	4	3	4	3	1	1	1	1						
(12)	4	2	7	1	4	1	1	1	3	1	1					
(13)	7	7	5	1	1	5	2	5	1	5	5	3				
(14)	7	7	5	1	1	1	3	1	1	5	4	1	1			
(15)	7	7	4	1	3	1	1	6	5	6	4	5	1	1		

図2の通り、4つの CL が形成された。Y は、CL1 では日本語の知識・技能（文法、漢字、4 技能）が高いことが最も重要だと述べ、その上で授業の中の順番をよく考えて、わかりやすく教えることが大切であるとしている。CL2 は必ずしも必要ではないが、あったら役に立つもので「なかったら学習者ががっかりする」としている。CL3 では学習者が安心して気持ちよく学習できる環境の重要性について述べているが、この意識は、自分の学習者としての経験が基礎となり、その後に受けた教師研修で強化されている。CL4 では各学習者のニーズを考え、宿題や試験などで学習者を理解し、問題があったら一緒に解決すると述べている。ここでは学習者の違いというものが宿題やテストで測れるもの、つまり日本語の能力を中心に語られている。各 CL は CL1 が＜授業をする際に必要な基礎的事項＞、CL2 が＜日本人教師が持つ資質＞、CL3 が＜学習者のやる気を引き出すために必要なこと＞、CL4 が＜学習者の能力や考え方に合わせた教育＞と名付けられる。

4.3 協力者 2 名の共通点と個別の特徴

4.3.1 協力者 2 名の共通点

2 名の共通点は、まず連想項目に「授業の振り返り」が含まれていることである。2 名はいずれも国際交流基金による教師研修の受講歴があり、この項目はそこで学んだことが影響している可能性がある。また、X は CL4 で、Y は CL2 で共に日本に関する経験的知識、情報の不足を意識した項目が出現している。ただし、その捉え方は若干異なり、X は知識、情報がなくても、調べ方を知っていることが必要と

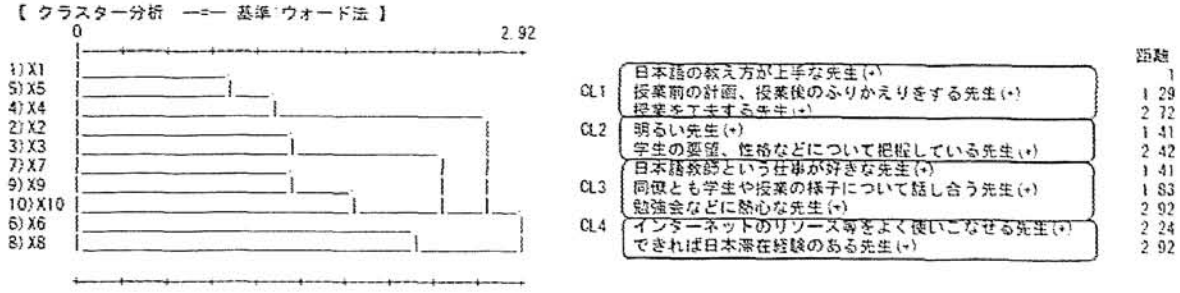

図 1.協力者 X のデンドログラム

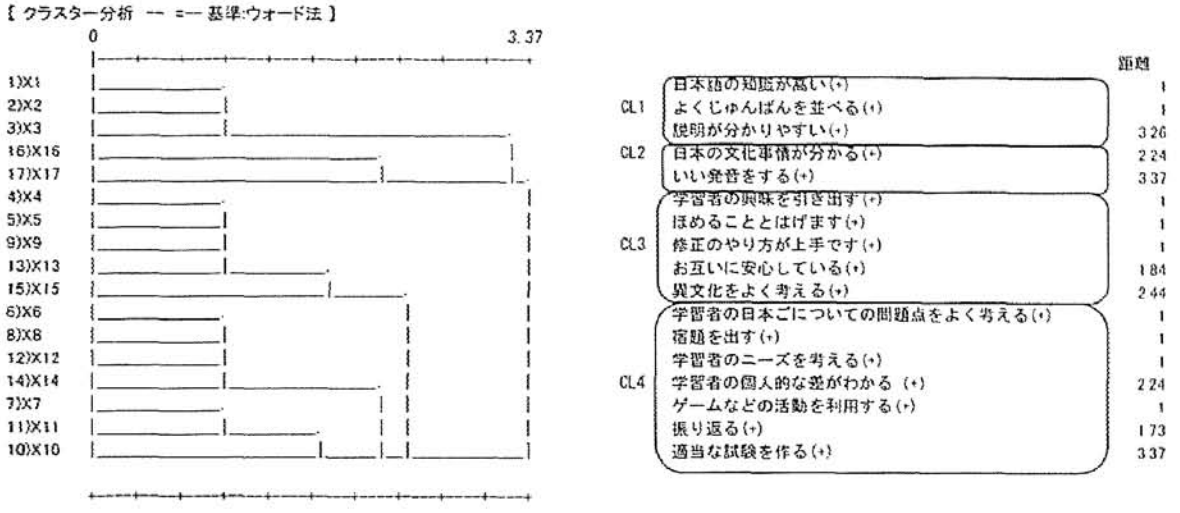

図 2.協力者 Y のデンドログラム

し、NNT が不足を補う必要性についても述べているのに対し、Y は必ずしも必要ではないがあったら役に立つとのみ述べている。

4.3.2 協力者 2 名の個別の特徴

X は他の教師との関わりについてもコメントしており、日本語教師という仕事が好きで、日本語を上手に教えるために研鑽・努力し、教室外での取り組みも積極的に行う、明るい日本語教師像が描かれている。一方、Y は日本語の知識が高いことが最も重要であるとし、教師は学習者に知識を与える人という意識が見られる。また、自らの研修での経験から学習者が安心して気持ちよく学習できる環境作りも必要だとしている。

5. 考察：NNTのビリーフ研究で PAC分析を使う意義と使用する際の留意点

5.1 PAC分析を使う意義

1）日本人が主導権を握るのでなく、NNT 自身の中から出された連想語を元にデンドログラムを析出し、それを見ながらインタビューすることにより、NNT 主導で話を進めることができる。

2）母語でない日本語を使う NNT にとって、自分で出した連想項目を材料に話が進められるプロセスは、具体性があってわかりやすい。

5.2 PAC分析を使用する際の留意点

1）日本語能力試験 2 級に届かない NNT の場合、日本語力が原因で言いたいことがすべては言えない可能性がある。解決策としては、（部分）通訳をつける、辞書の使用を許可する等が考えられる。

2）調査、特にインタビューに時間がかかり、母語でない言語で長時間集中するのはかなりの負担になる。途中で休憩を入れてもいいだろう。

3）クラスターのイメージを表すことが難しいが、色、感覚、温度、場所でイメージするのはわかりやすい。ただし、国によってイメージが表すものを確認しながら進める必要がある。

4）クラスターの名付けが難しいという声もあったが、名付けは研究者側が行うので、参考程度でつ

けてもらえばいい。

5）質問が理解できても、自分の答が質問に合ったものか自信が持てない場合があるとのコメントがあった。研究者側はNNTが話しやすい雰囲気を作り、日本語を間違えても、答が質問から多少ずれていても構わないということを初めに伝えておくといいだろう。

6）具体的なエピソードなどを話していくうちに、その連想語を書いた理由、その時の気持ちなど、自分の考え方がはっきりするというコメントがあった。具体的な事柄を取っ掛かりとして話を引き出すことも効果的ではないだろうか。

6.まとめと今後の課題

本研究の結果、NNT２名には、「授業の振り返り」という連想項目、日本に関する経験的知識、情報の不足への意識という共通点が見られた。

また、本研究からは、NNTに対するPAC分析の使用は、自らの連想語を出発点としていることから、思考上の負担が比較的少なく、また、日本人主導でなくNNT主導で話を引き出せるという大きな意義があるということがわかった。一方で、NNTに対してPAC分析を行う場合は、日本語力の問題から、実施の際にいくつかの留意点がある。今後はそれらを踏まえ、必要なら通訳をつける、辞書の使用を認める、休憩を入れる等に加え、NNTが話しやすい雰囲気を作り、インタビュー技術を向上させて、上手く話を引き出せるようにすることが必要である。

付記：本研究は、早稲田大学特定課題研究助成費（課題番号 2008B-322）による研究成果の一部である。

参照文献

池田庸子（2007）「非漢字圏学習者の漢字観に関する事例研究」『茨城大学留学生センター紀要』5、31-40.

小澤伊久美・坪根由香里（2008）「日本語教師のビリーフ調査への PAC 分析の活用について－先行研究とパイロット調査との比較から－」PAC 分析学会第１回研究大会抄録、21-24.

才田いずみ（1997）「日本語教育実習と実習生の内的変化」『日本語教育論文集－小出詞子先生退職記念－』凡人社、345-357.

才田いずみ・小河原義郎（1999）「日本語教育の実習生と現職教師の態度構造比較」『日本語教育方法研究会誌』6(1)、40-41.

坪根由香里・小澤伊久美・嶽肩志江（2008）「教師のビリーフ研究における PAC 分析活用の可能性と留意点－HALBAU と SPSS による分析結果の相違についての考察から－」PAC 分析学会第２回研究大会抄録、17-20.

豊田秀樹（2007）『共分散構造分析［Amos 編］』東京図書

内藤哲雄（2002）『PAC 分析実施法入門［改訂版］』ナカニシヤ出版

八若静美子（2007）「韓国大学部留学生の日本語学習における自己評価の変容」『茨城大学留学生センター紀要』５、41-52.

平野美恵子（2008）「ルーマニア日本語教育における非母語話者教師の意識：PAC 分析による事例研究」『ヨーロッパ日本語教育：第 13 回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』13、164-171.

藤田裕子（1996）「実習前後の実習生の授業観の変化－PAC 分析による３つの事例報告－」『平成 7－8（1995-1996）年度文部省科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書　課題番号 07680303　日本語教育における実習生と学習者の認知的・情意的変容の研究』、11-37.

藤田裕子（2007）「インターネットを利用した作文授業の効果－日本語で書くことに対する留学生の態度構造の変容－」『桜美林言語教育論叢』３、17-31.

藤田裕子・佐藤友則（1996）「日本語教育実習は教育観をどのように変えるか－PAC 分析を用いた実習生と学習者に対する事例的研究－」『日本語教育』89、13-24.

古別府ひづる（2008）「タイ中等教育機関におけるタイ人日本語教師の良い日本語教師観－PAC 分析と半構造化面接より－」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』5、37-46.

丸山千歌（2007）「日本語学習者が日本語読解教材から受ける影響－読解内容を知る上での PAC 分析法の有効性－」横浜国立大学留学生センター『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』14、145-158.

横林宙世（2004）「日本語教員養成課程履修生の考える『良い日本語教師』のイメージ（１）」『西南女学院大学紀要』８、107-116.

横林宙世（2005）「日本語力の低い留学生に対しての面接調査－PAC 分析の有効性」河原崎幹夫先生古希記念論文集実行委員会編『教師づくり教材づくり日本語教育』凡人社、71-82.

つぼね　ゆかり／早稲田大学　日本語教育研究センター（tsubone@aoni.waseda.jp）
はった　なおみ／国際交流基金　日本語国際センター（Naomi_Hatta@jpf.go.jp）